

近江六角氏の拠点形成―前期赤松氏との比較を通じて―

新谷和之

はじめに

本稿では、武家拠点の形成という観点で六角氏と赤松氏を比較し、前期赤松氏の特質や播磨の地域性を考える視座を得ることを目的とする。

六角氏と赤松氏は、ともに畿内近国に勢力基盤をもち、中世後期の政治史に大きな影響力を与えた。戦国期の居城である観音寺城（滋賀県近江八幡市・東近江市）と置塩城（兵庫県姫路市）は、平地の守護所から山城への展開を示す好例としてこれまで注目されてきた。ここでは、非求心的な縄張が守護系大名特有の権力構造と絡めて説明され、⁽¹⁾家臣団集住による縄張の肥大化が指摘されている。⁽²⁾

後期赤松氏に関しては、室町幕府 守護体制論とも呼応して権力構造や政治過程が精緻に解明さ

れ、そのなかで拠点の推移が意義づけられている。⁽³⁾ 筆者は以前、観音寺城の拠点としての機能を文献史料から探ったが、ここでは先行する赤松氏の研究を意識して分析を行った。

このように、戦国期については両者の比較検討が進んでいるが、応仁・文明の乱以前の守護拠点については、近江も含め全国的に実態がよくわかっていない。そのなかで、ひょうご歴史研究室の赤松氏と山城研究班では、嘉吉の変以前の赤松氏にスポットを当て、山城や居館、禅院の形成をトータルに把握し、学際的に検討を加えた。一連のプロジェクトは、前期赤松氏の研究水準を一気に引き上げるとともに、いまだ実態が不明な南北朝・室町期の守護所論に一石を投じるものといえよう。そこで本稿では、赤松氏の事例を参照しながら、近江における守護拠点の推移について整理を行う。一では、鎌倉時代から室町時代にかけての在国の

守護館にスポットを当て、六角氏の本拠形成の様相に迫る。二では、観音寺城を事例に、本格的な山城が営まれる契機と背景について論じる。三では、観音寺城が六角氏の居城としてどのような役割を果たしたかを明らかにするとともに、国内の城館の分布をもとにその位置を論じる。以上の検討を通じて、六角氏の拠点形成の特質を探り、赤松氏との比較を試みたい。

一、平地の守護館

六角氏は、宇多源氏佐々木氏の惣領家にあたり(図1)、佐々木荘を名字の地とした。佐々木荘は蒲生郡の北西部(琵琶湖岸寄り)に位置し、東山道(近世の中山道)と八風街道が交差する交通の要衝であった。この一帯は近江のほぼ中央にあたり、地形的にも開けている(図2)。一国支配の拠点を置くにはふさわしい場所といえるだろう。これに対して、赤松氏の名字の地は播磨の西寄りに位置し、山がちな地形である。拠点の占地が大きく異なることがわかる。

六角氏の当主は近江守護の地位を代々世襲し、幕府のもとで一国の公権を行使する。しかし、北近江には同じ佐々木一門の京極氏が所領をもち、幕府との深い関わりをもとに六角氏に匹敵するほどの勢力を誇った。琵琶湖西岸の高島郡では、佐々木氏の系譜を引く国人たちが高島七頭(西佐々木同名中)と呼ばれる一揆を形成した。彼らは室町幕府の奉公衆であり、將軍に直属する立場にあった。⁽⁵⁾滋賀郡には、日本最大級の神社権門である延暦寺が存在し、寺領における幕命の遵行を担った。⁽⁶⁾このように諸勢力が分立するなかで、六角氏の実質的な勢力範囲は近江東南部にほぼ限定された。

前期赤松氏においては、一門が在京活動を行い、独自の基盤をもって存立していたことが明らかにされている。⁽⁷⁾佐々木氏の場合、鎌倉期に分立した一門がそれぞれ独立した家として確立していったことはうかがえるが、南北朝・室町期以降の庶子の動向は判然としない。そのなかで、六角氏頼の弟定詮の系統は山内氏を称し、六角氏の政務を補佐し、当主が幼少の折にはその役割を代行することもあった。山内氏は対外的な交渉にも携わり、

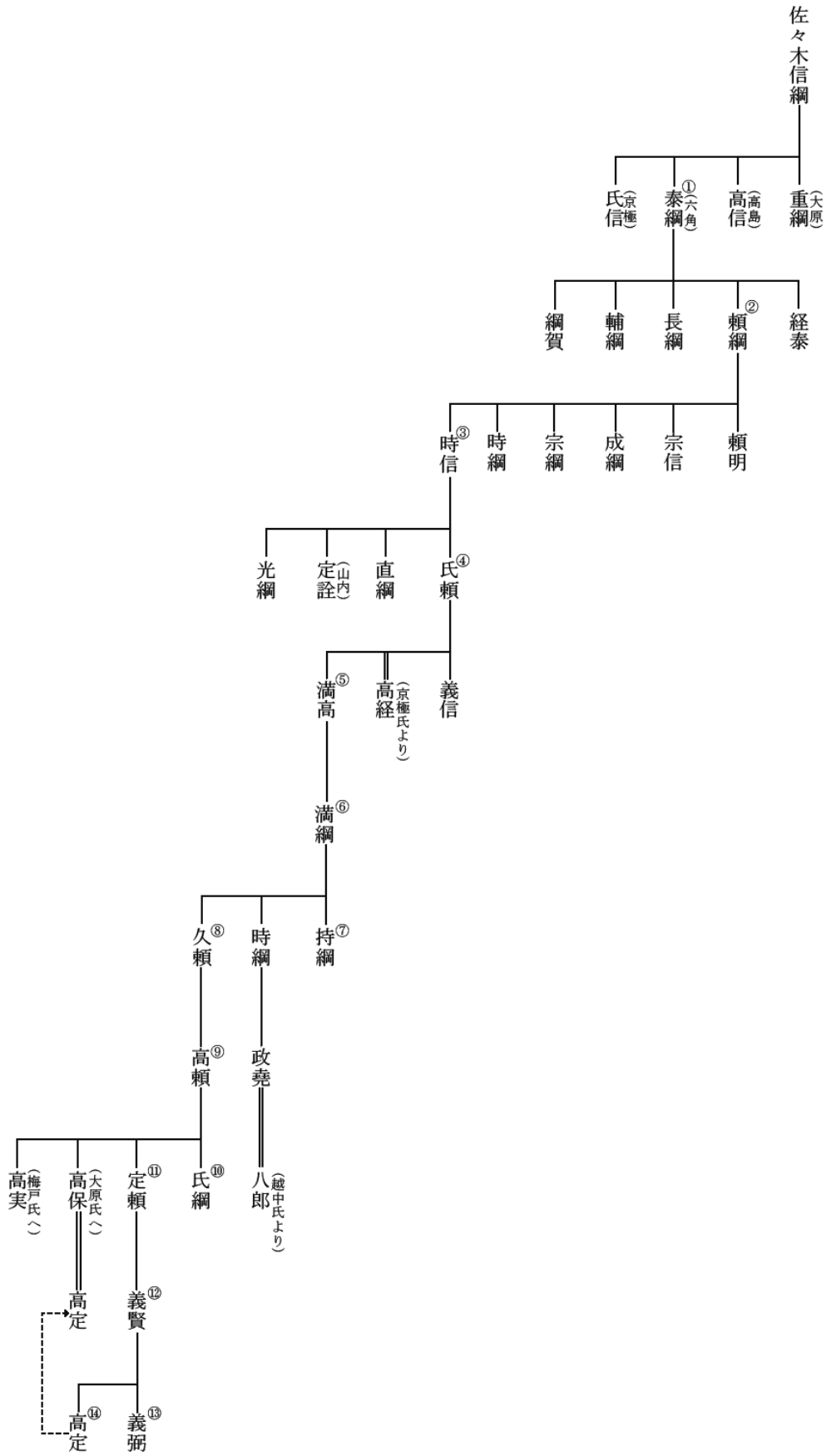


図1 六角氏略系図



図2 六角氏の本拠域（註4拙著）

明応の政変後に就綱が一時近江守護に補任されているが、惣領家を脅かすような存在にはならなかった。赤松氏の事例と比較すると、南北朝・室町期に分立した庶子は、惣領に対する自立性をそれほどもたなかったとひとまず考えておきたい。

佐々木荘の荘域は、現在の近江八幡市と東近江市にまたがり、佐々木宮（沙々貴神社）など佐々木氏ゆかりの施設が所在する（図3）。佐々木荘は延暦寺の千僧供料所で、佐々木氏はその下司をつとめていた。両者は、荘園の経営をめぐるしばしば衝突する。建久二年（一一九一）には、年

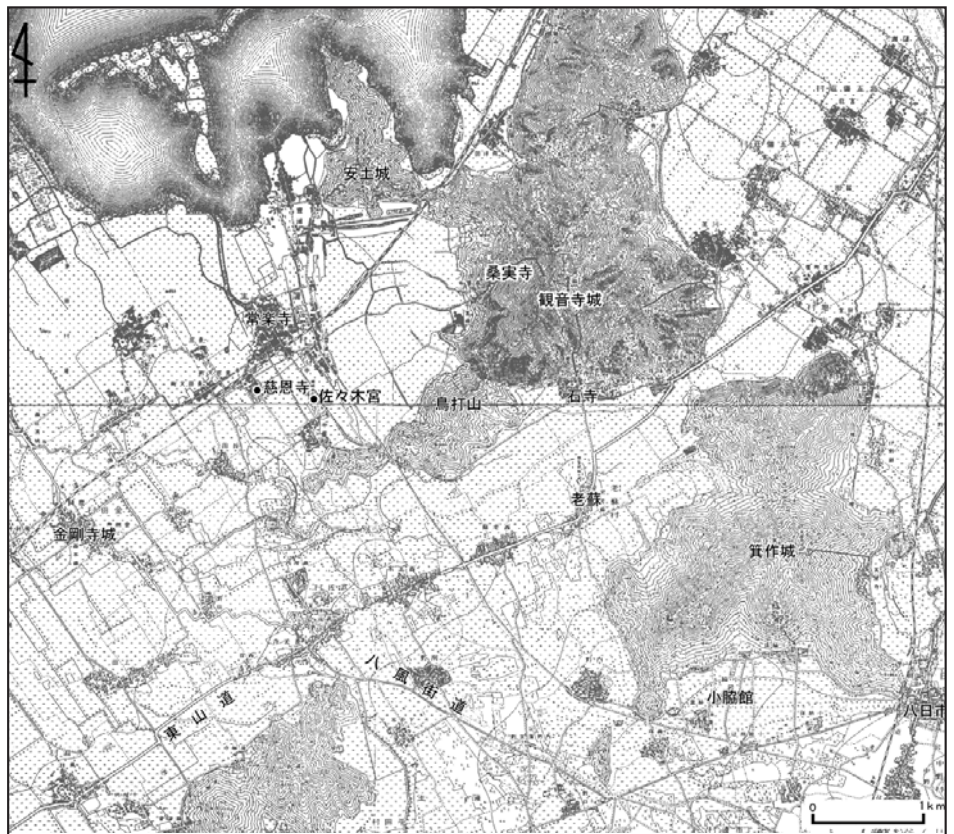


図3 戦国期近江要図（註4拙著）

貢の未進分を責め立てた宮仕を殺害したとして延暦寺が強訴を起こし、佐々木定綱らが流罪に処された⁹。しかし、観応二年（一一三五一）の刃傷事件では、幕府も朝廷も裁許に消極的な姿勢をとる。ここから、佐々木氏の影響力が徐々に強まってい

く様子をみることができる。⁽¹⁰⁾

佐々木氏の在国の居館は、はじめ小脇（東近江市）にあった。建久元年、源頼朝が上洛の途次に小脇宿を訪れ、佐々木定綱がこれに供奉している。⁽¹¹⁾小脇宿は蒲生野宿とも呼ばれ、鎌倉期には東山道の宿駅であった。小脇は東山道の街道筋からは離れているが、佐々木氏の居館があったため、宿駅が設定されたとみられる。

居館跡は東近江市脇の集落内に比定され、「堀田」など城館を思わせる地名が伝承されている。

図4の地籍図によると、居館は方二町四方の不等辺四角形をなし、周囲に堀をめぐらせていたと考えられる。過去の発掘調査でも、堀跡が複数検出されている。出土した土器は鎌倉期から室町期のものとされ、室町期まで何らかの形で利用されたことがわかる。⁽¹²⁾

小脇館は、地域の開発拠点としての性格も備えていたと考えられる。一帯を灌漑する狛井は、狛長者による開発という伝承をもつが、佐々木頼綱により新井が整備されたことが確認できる。徳治二年（一三〇七）、対岸の鯉江荘の領主であった

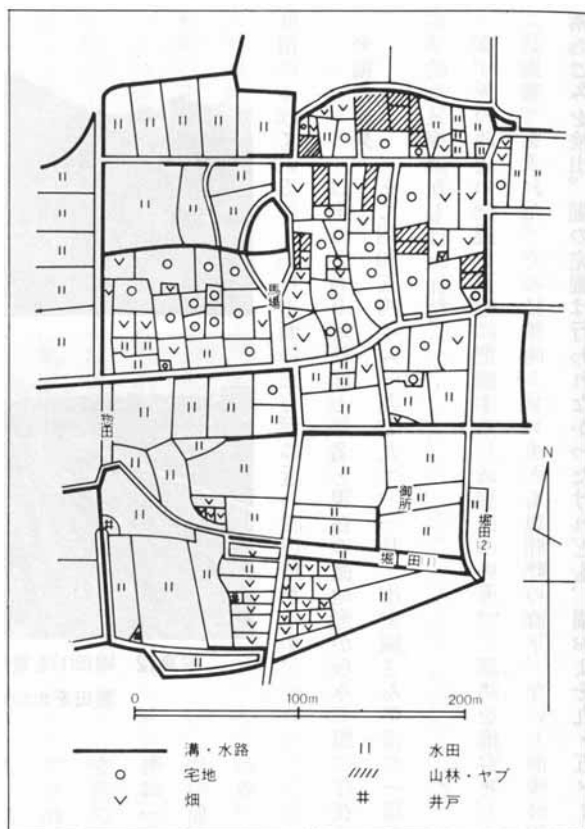


図4 小脇館（『八日市市史』二）

興福寺は新井の整備に反対し、佐々木氏との間で相論が起きていた。⁽¹³⁾小脇館の堀と用水との関わりは判然としないものの、佐々木氏が居館を中心に開発を推進しようとしたことは十分に想定できよう。

室町幕府のもとで、六角氏当主は京都での生活を基本とするようになる。六角の名乗りも、在京時の屋敷地の場所に由来している。六角氏は、南北朝期には既に奉行人や郡奉行といった機構を編成していたが、彼ら中核的な被官の一部も在京していたことが確認できる。権力内の合議である内

談が京都で催されていることから⁽¹⁴⁾、政治の中心は京都にあり、在国の居館の役割は限定的であったとみられる。

南北朝・室町期の本拠域では、禅院・律院の整備が顕著に見受けられる。六角氏頼は、夢窓疎石と母の菩提を弔うため、金剛寺を創建した。付近の西庄にあった永明寺も、氏頼が創建した禅院（尼寺）と伝わる。慈恩寺は、鎌倉時代には存在が確認できるが、氏頼が律院として整備した。氏頼は、仏神への信仰の厚い人物として対外的に認知されていた。これ以降の六角氏当主も本拠域に禅院・律院を営んだことが、戒名などから断片的にうかがえる。⁽¹⁵⁾ こうした禅院・律院の整備は、赤松氏との比較が可能である（本誌掲載の大村論文を参照）。

金剛寺は、佐々木頼綱の金田館の地に営まれたとされる。一五世紀後半から一六世紀前半にかけて、金剛寺をめぐる攻防が相次ぎ、城館としての実態が史料上明らかになる。長享元年（一四八七）、足利義尚の軍勢は金剛寺を攻め、伊庭氏以下の被官らが甲賀郡へ没落した。⁽¹⁶⁾ 延徳三年（一四九一）、

細川政元被官の安富元家は、金剛寺の戦いで六角高頼を破り、金剛寺の構えを改修している。⁽¹⁷⁾ 翌年、高頼が金剛寺を攻めると、安富は一時観音寺へ退避し、築瀬河原の戦いで高頼に大勝している。⁽¹⁸⁾ 明応二年（一四九三）、佐々木氏庶流の越中氏の息子が近江守護に補任されると、金剛寺が守護所となっている。⁽¹⁹⁾

以上は六角氏が幕府と敵対し、守護の地位を追われた時期の状況ではあるが、金剛寺が守護の行政拠点として機能していたことがわかる。こうした金剛寺の機能は、前代にさかのぼる可能性が高

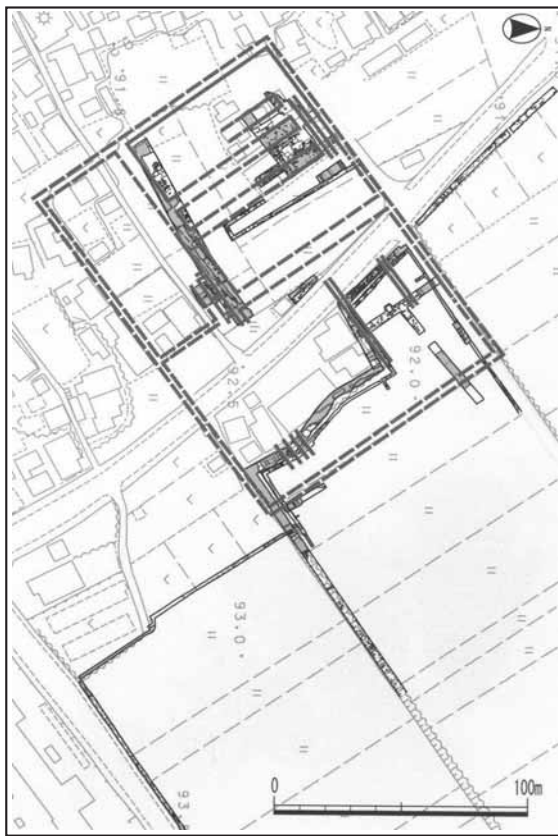


図5 金剛寺城 1期（註20）

い。金剛寺城跡の発掘調査では二時期の遺構面が検出され、1期が一四世紀から一五世紀、2期が一六世紀初頭から中葉に属するという(図5)⁽²⁰⁾。これを踏まえると、金剛寺は南北朝・室町期には居館としての実態を伴っていたと考えられる。

先行する小脇との関係をめぐることは、小脇から金剛寺へ居館が移ったとする見解⁽²¹⁾と、金剛寺を別業と捉える見解⁽²²⁾が並立している。その当否は判断しがたいが、小脇の宿駅は鎌倉幕府の滅亡とともに機能しなくなり、小脇は政治的な地位を次第に低下させていったとみられる。このことは、六角氏の禅院・律院が概ね東山道よりも北側に造営されていることから裏づけられよう。

以上、鎌倉期から室町期にかけての六角氏の拠点形成について概観した。この時期は、前期赤松氏の活動時期と重なるが、六角氏の在国時の居所は基本的に平地の居館であり、赤松氏のような山城の形成はみられない。居館そのものの実態も、南北朝期・室町期は判然とせず、むしろ禅院・律院の整備の方が顕著である。六角氏と比較すると、前期赤松氏が国元の拠点をしっかり整備していた

ことが改めて浮き彫りとなる。

二、観音寺への拠点移動

観音(正)寺は西国三十三所の三十二番札所として、今も多くの参詣客を迎え入れている。観音寺が建つ織山(標高約四三三メートル)は、国内有数の平野部を見渡す位置にあり、いわゆる「国見の山」である。観音寺の奥院とされる磐座には、平安後期の摩崖仏が線刻されており、巨石信仰が観音寺の建立に先行する可能性もある⁽²³⁾。

観音寺は、南北朝期には武家方の駐留がしばしば確認できる。建武三年(一一三三)、北畠顕家は六角氏頼を観音寺城に攻め、五〇〇余人を討ち取った⁽²⁴⁾。観応二年(一一三三)、足利尊氏と弟直義が近江で戦った際には、山内定詮が直義方の軍勢を観音寺城に引き入れている⁽²⁵⁾。

ただし、この時期の軍事利用は臨時的なものにとどまり、山内は基本的に寺院の空間であった。永享四年(一一四三)には、織山の用益をめぐる観音寺側と山前南荘の間で相論が起き、室町幕

府の法廷に裁決がもち込まれている。ここでは、六角氏が観音寺方に肩入れしていたことが確認できる。⁽²⁶⁾このことは、両者の密接な関係を示すと同時に、六角氏が観音寺に一定の配慮をしていたこともうかがえる。この時点では、六角氏が観音寺の空間を接收し、自らの拠点とする意図は見受けられない。

応仁・文明の乱では、六角高頼は西軍方につき、京極氏ら西軍方と近江国内で戦った。そのなかで、観音寺は再び戦闘の舞台となっている。応仁二年（一四六八）、京極持清は六角高頼を観音寺城に攻める。高頼は自焼没落し、籠城していた兵二三人の首が城下に降ろされた。⁽²⁷⁾文明元年（一四六九）八月にも、京極方の多賀高忠が観音寺城を攻めている。⁽²⁸⁾

ただし、文明五年時点でも観音寺は「山寺」と認識されており、⁽²⁹⁾本格的な城塞化は及んでいなかったとみられる。六角氏は、乱後は恒常的な在国が確認できるが、日常的な生活の場は別にあつたようである。前章では、足利義材の六角征伐に際して、細川方が観音寺城と金剛寺城を接收していた

ことを確認した。これを踏まえると、金剛寺城が平時の居館で、観音寺城が有事に籠もる詰め城という位置づけ（いわゆる根小屋式城郭）となるう。

千田嘉博は、村田修三の「山ノ城」論を踏まえ、⁽³⁰⁾日常生活にも対応した本格的な山城が一六世紀第二四半期に各地で出現したと述べた。⁽³¹⁾観音寺城の事例は、そこでの重要な論拠となっているが、観音寺城が本格的に整備されたのがいつかは必ずしも論証されていない。また、仮にそれが一六世紀第二四半期であるとして、なぜその時期であるかの論理的な説明がなされていない点も問題である。

中井均は、各地の山城の発掘調査例をもとに千田説を検証し、西国では一五世紀後半以降、山城の居城化が順次進んでいくことを明らかにした。その背景として、⁽³²⁾応仁・文明の乱後の軍事的緊張への対処を想定している。武家拠点の山上への移動は戦国期の趨勢ではあるが、その契機は一様ではなく、権力ごとに個別にみていく必要がある。

観音寺城の本格的な整備は、金剛寺城の史料上



図6 観音寺城縄張図 (藤岡英礼)

の所見を踏まえると、少なくとも一六世紀に入ってからである。六角氏の場合、在京から在国への転換と、山城の整備とが連動しないことに注意したい。一六世紀前半の六角氏は、二度にわたる六角征伐を乗り越え、室町幕府の政治体制へ徐々に復帰していくとともに、分国支配の体制を整えていった。こうして政治的地位が安定していくなかで、観音寺城の居城としての整備が進んだ。六角氏の居所が山上に移ったことは、軍事的危機への対応よりもこうした政治支配の面から説明すべきである。

そのことは、観音寺城の特異な縄張構造からもうかがえる。観音寺城は、本来主郭を設けるべき山頂に小規模な曲輪しか設けず、無数の削平地を造成している。これらは谷筋ごとにいくつかのユニットを形成し、直線道路沿いに削平地が並ぶ状況が随所に見られる(図6)。このような構造は、基本的に観音寺の坊院の区割りをそのまま踏襲しているとみてよい。直線道路が複数通じていることが、防御面で不利になることはいうまでもない。

叡山の尾根筋には、曲輪群を囲うように長大な

土塁ラインがみられる。これを城の防御施設とみる向きもあるが、戦時に敵の進攻が想定される東山道は、土塁とは反対の南側に通じており、城下の石寺も城の南方に位置する。観音寺城は明らかに南向きの城だが、土塁は南方からの進攻には全く対応できないのである。一連の土塁は、削平地の造成に伴う削り残しとみるのが妥当だろう。

このように、観音寺城の全体的なプランは、防御性の強化を意図したものととはなっていない。その理由としては、先行する観音寺の構造に制約を受けたことが考えられるが、整備のタイミングからすると、六角氏自身が居城の軍事機能をそれほど重要視しなかつたとも捉えられる。整備後の観音寺城がどのような役割を果たしたかは、次章で詳しくみることにしたい。

観音寺城の本格的な整備に伴い、観音寺の伽藍は山麓に移転したと伝承されている。しかし、観音寺の存在が一六世紀にも史料上確認できることから、近年では寺と城が同時に併存していたという見方が有力になりつつある⁽³³⁾。これに関わって、赤松氏の城山城では寺院に関する遺物が多数検出

されており、中世城郭には不釣り合いな巨大な礎石もみられる。城の普請と合わせて本堂の修造も行われており、城と寺の併存が史料上確認できる稀有な事例である。観音寺城とは存続時期や機能が異なるものの、先行する寺院を拠点城郭に取り込む動きが播磨でもみられることは注目される。

三、観音寺城の機能と分国内での位置

戦国期の観音寺城は、六角氏の当主や一門だけではなく、被官も含めた在城が確認でき、分国支配の中核として機能した。領民たちは、六角氏の裁定を求めてしばしば登城し、城内に法廷が開かれた。ただし、訴訟当事者への登城要請は守護代の伊庭氏が先行して実施しており、⁽³⁵⁾観音寺城以前の守護所の機能に含まれていたとみられる。

観音寺城には、こうした訴訟事務や文書発給などを担う被官たちが詰めていた。寺院との折衝にあたる寺奉行の存在が確認でき、⁽³⁶⁾一定程度の組織化が図られていたものと思われる。城内の削平地の多くは、観音寺の寺坊跡に由来するとみられる

が、被官たちの屋敷や詰所としても有用であったと考えられる。

六角定頼は、足利義晴期の幕府政治に関与し、六角氏の最盛期を築く。この頃には、六角氏の威光を求めて国外からも来訪者があり、観音寺城は対外的な折衝の場としても機能した。そのなかで、城内では連歌などの文化的な活動が展開された。天文一三年（一五四四）に近江を訪れた連歌師の宗牧は、観音寺城内の当主や家臣の屋敷で歓待を受けている。⁽³⁸⁾西尾根上の曲輪群の発掘調査では、礎石建物や庭園の遺構が検出され、土師器皿が大量に出土していることから、儀礼空間としての性格も浮かがる。

こうしたもてなしの場は、基本的に山上にあったとみられる。織山の南麓には御屋形と伝承される方形区画があり、立派な石垣を伴うことから、六角氏の山麓の居館と目されている。岐阜城の例を援用して、山上と山下の使い分けを想定する見解もあるが、⁽³⁹⁾山麓居館の存在を確実な史料から見出すことはできない。

このように、観音寺城には国内外の様々な人々

が出入りしたことが確認できる。そこでの城のイメージは、外敵を寄せ付けない閉鎖的なものではなく、諸階層を迎える開放的なものであった。この点からも、山上への居所の移転が有事への備えを優先したものではないことが裏づけられる。いささか印象的な評価ではあるが、広域の視認性と周囲から仰ぎみられる立地が、六角氏の権威の誇示につながったと考えている。

観音寺城では、全山にわたり石垣の分布が確認できる。⁽⁴⁰⁾近年、安土城以前の城郭に石垣が用いられたケースが各地で報告されており、戦国期における城郭石垣の特色が明らかになりつつある。⁽⁴¹⁾そのなかで、観音寺城には高さ六メートルを超える高石垣が存在し、石材には採石に伴う矢穴をみることができ、全国的にも高い技術水準を誇っていた。こうした採石や石積み技術は、もともと寺院がもっていたと考えられる。弘治二年（一五五五）、六角義賢は金剛輪寺（愛荘町）に城内の石垣普請を命じている。⁽⁴²⁾城内の石垣は多様であり、すべてがこのタイミングで整備されたとは考えにくい。寺院の技術が築城に活かされたことは間

違いない。

近世城郭の石垣は、櫓などの重量物を支える土台となつたが、観音寺城をはじめ戦国期の石垣にはそこまでの強靱さは期待できない。法面を安定化させるという実利的な面に加えて、視覚的な効果を期待して石垣を築いたのだろう。山上への居所の移転が、軍事性よりも権威性の強化を意図したものであることは前記したが、石垣の普請はこうした築城目的にも合致するものといえる。すなわち、六角氏は専ら居城を荘厳する目的で石垣を整備し、自身の権威をさらに高めようとしたのである。

観音寺城の周辺には、佐生城・箕作城・和田山城（いずれも東近江市）といった山城があり、それぞれ本拠地の防衛の一端を担ったものと思われる。ただし、いずれも規模が小さく、拠点となりうるような城郭は周辺ではみられない。山地が少ないという地形条件を考慮しても、観音寺城に拠点の機能が集中していたことは間違ひなかつた。⁽⁴³⁾

水茎岡山城（近江八幡市）は、観音寺城の近隣では最も規模の大きな山城である。当城は、守護

代伊庭氏の被官である九里氏の居城であつた。伊庭氏と九里氏は、足利義澄を当城にかくまい、六角高頼と対立した。二度にわたる「伊庭氏の乱」（一五〇二～二〇年）の末、伊庭氏は六角氏権力の中枢から外れるが、当城もそれ以降、使用が確認できない。少なくとも、六角氏の地域支配拠点には位置づけられなかつたのだろう。

蒲生郡南東部の日野（日野町）一帯では、蒲生氏が勢力を誇つていた。大永二年（一五二二）から同三年にかけて、六角定頼は蒲生家の内紛に介入し、居城である音羽城を攻めた。定頼は、同城が名城であることを惜しみながらも、「惣国に城郭停止すべき」としてこれを破却した。⁽⁴⁴⁾ 実態はともかく、領内での築城を規制していく志向性をここにみることができる。観音寺城への拠点機能の集中は、これとは裏腹の関係で捉えることができるよう。

永禄六年（一五六三）の「観音寺騒動」では、六角義弼に反発する被官たちが観音寺城内の屋敷を焼き、各々の館に戻つた。⁽⁴⁵⁾ ここからは、被官たちが観音寺城内と自領内の双方に屋敷をもつてい

たことがわかる。在地領主でもある被官たちを観音寺に在城させることで、六角氏は求心力を保っていたのである。

しかし、どちらか一方での活動しか史料上確認できない者もあり、すべての被官が観音寺城と自領を行き来していたわけではなさそうである。たとえば、六角氏の軍事・外交面で活躍した永原氏は、観音寺城内での活動がみられない。永原氏は、野洲郡の居館を基盤とし、相論の裁定や連歌の興行などを独自に行い、六角氏からは自立して地域支配を推進した。⁽⁴⁶⁾

三雲氏も、永原氏と同様に外交面での活動が顕著で、甲賀郡西部の自領が主な活動基盤であったとみられる。「観音寺騒動」の勃発時には六角義賢を自邸に迎え、最末期の六角氏を主に軍事面でサポートした。居城の三雲城（湖南市）は、本格的な石垣を伴う山城で、小領主が割拠する甲賀郡内では突出している。近江南部で石垣をもつ戦国期城郭は、小堤城山城（野洲市）などごく限られ、いずれも六角氏の関与が想定されている。⁽⁴⁷⁾ 被官の側も、六角氏の威光を背景として、本格的な居城

の整備を推進することができたのである。⁽⁴⁸⁾

以上のように、戦国期の六角氏は観音寺城へ政治的な機能を集約し、他に顕著な地域支配拠点を置かなかつた。分国の外縁部では、被官たちの拠点形成や地域支配を容認する一方、一部の被官の居城に挺入れし、間接的な地域の掌握を目指したとみられる。

赤松氏が最終的な居城とした置塩城も、礎石建物や庭園を伴う屋敷地を山上に構え、日常生活に対応した拠点城郭である。城内を荘厳する石垣が築かれた点も、観音寺城と類似する。なお、先行する白旗城にも石垣がみられる。石垣の構築年代については慎重な判断が求められるが、播磨国内では石垣が早くから城郭に用いられていた可能性がある。この点については、本誌所収の山上論文をご参照いただきたい。

しかし、一国内での位置づけについては、置塩と観音寺で大きな相違が認められる。置塩は姫路の中心部からは離れており、周囲からの眺望もあまりよくない。当該期の播磨では、地域権力の拠点形成が進み、多極分散的な様相を呈していたと

いう。⁽⁴⁹⁾ 置塩は播磨を代表する山城ではあるが、唯一の政治拠点ではなかったのである。赤松氏の場合、前期と後期の間大きな断絶が認められ、室町期の前提を踏まえて地域支配や拠点の整備を推進することが困難であった。そのことが地域権力の台頭を招き、赤松氏や置塩城の位置づけを相対的に低下させることになったとみられる。

おわりに

本稿では、前期赤松氏の拠点形成をめぐる近年の研究成果を踏まえて、近江六角氏の拠点形成について概観した。赤松氏の事例との比較を通じて得た知見を、以下にまとめておく。

前期赤松氏が活躍した南北朝・室町期、六角氏は在京での活動がメインであった。禅院・律院の整備は確認できるが、国許の屋敷がどのような実態を備えていたかは判然としない。観音寺の軍事利用は南北朝期には確認できるが、恒常的な山城は存在しなかった。一方、前期赤松氏は、居館だけでなく、白旗城や城山城といった山城を築き、

国内の軍事情勢に対処していた。総じて当該期には、前期赤松氏の方が六角氏よりも国元の拠点をしっかりと整備していたといえよう。

六角氏は応仁・文明の乱を機に在国するが、観音寺城が本格的な政庁となるのは一六世紀に入ってからである。それまでは、平地の金剛寺城が守護所として機能していた。観音寺城は乱後、度々戦闘の舞台となっており、金剛寺城と同時に使用されたことは間違いない。そこでの両者の関係は、平時の居館と詰め城（要害）のセット（いわゆる根小屋式城郭）と捉えられる。守護が在京から在国へと転じるタイミングで、山城が本格的に整備されたわけではないことに注意したい。

一六世紀の観音寺城には、当主だけでなく、六角氏の分国支配を担う被官たちの在城も確認できる。国内外の諸階層が六角氏との接触を求めて来訪しており、標高の高さとは裏腹に開放的な側面もうかがえる。観音寺への居所の移転は、有事への備えよりも分国支配の深化という観点から説明すべきである。

当該期の六角氏は、観音寺城の他に顕著な地域

拠点を構えず、分国支配の政治的な諸機能を観音寺城に集約させていた。分国の外縁部に拠点をもちつ被官たちは、六角氏からは自立して地域支配を推進する一方で、築城に際しては六角氏の介入を受けることもあった。これは単に六角氏からの一方的な働きかけにとどまらず、被官の側にも一定のメリットがあつたと考えられる。

後期赤松氏の居城である置塩城も、居住に対応した本格的な山城であり、石垣による荘厳化などに観音寺城との類似性がうかがえる。その一方で、播磨国内では地域権力の分立が進み、置塩の政庁としての機能は多分に制約を受けたものであった。前期の拠点形成や国内諸勢力との関係をスムーズに継承できなかったことが、こうした位置づけの違いを生んだとみられる。

以上のように、拠点形成において、六角氏と赤松氏は時期ごとに対照的な様相を示している。山城の構築を含む国元の拠点形成は赤松氏が先行するものの、居城を中心とした分国支配のシステムを最終的に整えたのは六角氏である。六角氏が赤松氏を「追い抜いた」ようにみえるが、もちろん

そう単純に捉えるべきではない。それぞれの政治情勢や地域性を踏まえて、拠点の位置づけを時期ごとに丹念に解き明かす必要がある。

なお、本稿では、港湾や都市などの経済拠点と守護の城館との関わりについてはほとんど触れることができなかった。観音寺城下の石寺は楽市令の観点から豊富な研究蓄積を有するが⁵⁰、都市としての規模は小さく、領国経済の中心にはなり得なかった。守護の拠点が経済的に卓越しない点は、播磨も同様とみられる。こうした流通経済の問題も含めて、守護所の位置づけを今後検討していきたい。

- (1) 千田嘉博 『織豊系城郭の形成』(東京大学出版会、二〇〇〇年)。
- (2) 福島克彦 『畿内・近国の戦国合戦』(吉川弘文館、二〇〇九年)。
- (3) 野田泰三 「戦国期における守護・守護代・国人」 『日本史研究』四六四、二〇〇一年)、小林基伸 「赤松氏の権力と拠点」 『赤松氏と播磨の城館 報告集』 大手前大学史学研究所、二〇〇七年)。
- (4) 拙著 『戦国期六角氏権力と地域社会』(思文閣出版、

- 二〇一八年)。
- (5) 西島太郎『戦国期室町幕府と在地領主』(八木書店、二〇〇六年)。
- (6) 下坂守『中世寺院社会の研究』(思文閣出版、二〇〇一年)。
- (7) 大村拓生「室町期赤松一門の構造」(『ひょうご歴史文化研究室紀要』七、二〇二二年)。
- (8) 新谷和之「南北朝・室町期における六角氏の家督交替と文書発給」(川岡勉編『中世後期の守護と文書システム』思文閣出版、二〇二二年)。
- (9) 『黒田俊雄著作集 第一巻 権門体制論』(法藏館、一九九四年)。
- (10) 新谷和之「六角氏頼」(亀田俊和・杉山一弥編『南北朝武将列伝北朝編』戎光祥出版、二〇二二年)。
- (11) 『吾妻鏡』建久元年二月一四日条。
- (12) 『八日市市史』二(八日市市役所、一九八三年)。
- (13) 『興福寺三綱補任』(『近江蒲生郡志』二、二二六七)。
- (14) 『蒲生文書』五二(『水口町志』下)。
- (15) 大河内勇介「近江守護佐々木六角氏と禅院・律院」(早島大祐編『中近世武家菩提寺の研究』小さ子社、二〇一九年)。
- (16) 『長興宿禰記』長享元年九月二四日条。
- (17) 『大乘院寺社雑事記』延徳三年八月晦日条。
- (18) 『晴富宿禰記』延徳四年四月一日条。
- (19) 『大乘院寺社雑事記』明応二年二月一六日条。
- (20) 『近江の城を掘る』(滋賀県立安土城考古博物館、二〇一七年)。
- (21) 『八日市市史』二(前掲)。
- (22) 中井均「近江国」『守護所・戦国城下町を考える(第2分冊) 守護所・戦国城下町集成』(二〇〇四年)。
- (23) 『安土城への道 聖地から城郭へ』(滋賀県立安土城考古博物館、二〇一四年)、齋藤慎一『中世東国の信仰と城館』(高志書院、二〇二二年)。
- (24) 『太平記』一五「奥州勢著坂本事」。
- (25) 『太平記』(天正本)「追罰直義宣旨御遣附尊氏下向近江事」。
- (26) 前掲註4拙著。
- (27) 「佐々木文書」一三一(『戦国大名尼子氏の伝えた古文書』鳥根県古代文化センター、一九九九年)、『碧山日録』応仁二年一月一〇日条。
- (28) 「片岡文書」(『大日本史料』八二)。
- (29) 「ふち河の記」(『群書類従』一八)。
- (30) 村田修三「大和の「山ノ城」」(岸俊男教授退官記念会編『日本政治社会史研究 下』塙書房、一九八五年)。
- (31) 前掲註1千田著書。
- (32) 中井均『中世城館の実像』(高志書院、二〇二〇年)。
- (33) 栗東市教育委員会・財団法人栗東市文化体育振興事業団『忘れられた霊場をさぐる2 山寺のうつりかわり 近江南部の山寺をさぐる 報告集』(二〇〇七年)。
- (34) 『城山城』古代山城と赤松の城』(たつの市立埋

蔵文化財センター、二〇二一年)。

- (35) 『橋本左右神社文書』(『戦国遺文 佐々木六角氏編』一七九)。
- (36) 『金剛輪寺下倉米銭下用帳』(愛荘町教育委員会、二〇一〇年)六三。
- (37) 前掲註5西島著書。
- (38) 『東国紀行』(『群書類従』三四〇)。
- (39) 千田嘉博『戦国の城を歩く』(ちくま学芸文庫、二〇〇九年、初版二〇〇三年)。
- (40) 『史跡観音寺城跡石垣基礎調査報告書』(滋賀県教育委員会、二〇一二年)。
- (41) 中井均『戦国の城と石垣』(高志書院、二〇二二年)。
- (42) 『金剛輪寺下倉米銭下用帳』(前掲)七〇他。
- (43) 新谷和之『図説 六角氏と観音寺城』(戎光祥出版、二〇二三年)。
- (44) 『経尋記』大永三年三月十八日条(『大日本史料』九一九)。
- (45) 『長享年後畿内兵乱記』(『続群書類従』五八〇)。
- (46) 前掲註4拙著。
- (47) 福永清治『小堤城山城・三雲城の縄張り構造と郡境域における六角氏の城郭運営について』(新谷和之編『近江六角氏』戎光祥出版、二〇一五年、初出二〇〇三年)。
- (48) 新谷和之『戦国期近江三雲氏の動向 大名権力と惣国一揆の接点』(『市大日本史』二三、二〇二〇年)、同『六角氏被官三雲氏と甲賀郡西部の城館』

(中井均先生退職記念論集刊行会編『城郭研究と考古学』サンライズ出版、二〇二二年)。

- (49) 前掲註3小林論文。
- (50) 近年の研究成果として、長澤伸樹『楽市楽座令の研究』(思文閣出版、二〇一七年)および同『楽市楽座はあったのか』(平凡社、二〇一九年)がある。

「付記」本稿は、ひょうご歴史研究室「赤松氏と山城研究班」二〇二一年度第二回研究会での報告および二〇二二年度ひょうご歴史フォーラム「前期赤松氏の実像 城郭と寺院から」のパネルディスカッションでのコメントをもとに構成した。また、JSPS科研費JP22K13209の交付を受けた研究成果の一部でもある。